

Strix 10 : 181-203 (1991)

多摩川中流域における鳥類相の変遷 — 多摩川探鳥会10年間の記録から —

日本野鳥の会東京支部・多摩川探鳥会リーダーグループ¹

はじめに

多摩川は、関東山地に発し東京都と神奈川県の間付近を流れ、東京湾に注ぐ代表的な都市河川であるが、広大な河川敷には今なお比較的良好な自然が残されており、多数の鳥類が生息している。同時に、都市住民の親水レクリエーションの場としても重要な位置を占めている。

日本野鳥の会東京支部では、多摩川中流域の貴重な自然を広く一般の人々に紹介して自然に関する理解を深める目的から、「多摩市の自然に親しむ会」(会長：成田光彰)とともに、毎月1回定例探鳥会を開催している。1980年3月からはじまったこの探鳥会が今回10周年を迎えたのを機会に、これまでの観察記録をとりまとめ、たえず都市化の影響を受けている多摩川中流域の鳥類相の変遷を解析したので報告する。調査研究の目的で収集した正確な記録ではないことから、多分に試行の域を出ていない面はあるが、全国各地で行なわれている定例探鳥会などの継続的観察記録をとりまとめるうえでの一例として参考になれば幸いである。

対象地域および分析方法

多摩川探鳥会のコースは、多摩川の河口から約40kmの中流域右岸(南岸)で、京王線鉄橋上流のニセアカシア林中央部(鉄橋より約100m)を起点として、下流に向かって東進し、大栗川との合流点上流の交通公園東端に至る延長約1.4kmの区間である(図1)。

今回分析に使用した種数および個体数は、1980年3月～1990年2月までの毎月第1日曜日に行なわれた探鳥会で、参加者が確認した鳥類の種および個体数を整理した、いわゆる「鳥合わせ」の記録で、以下の原則に従っている。

- ①探鳥会の開催時間(10～13時ごろまで、ただし7～9月は8時45分～12時ごろまで)中に観察されたものに限る。
- ②コース上から姿あるいは声によって確認できたものは、上空通過だけのものもすべて含める。
- ③普通種以外のもの(それまでに探鳥会で記録のない種やあってもごくわずかの種)は、

1991年11月20日受理

1. 〒206 東京都多摩市豊ヶ丘5-1-11-501 成田光彰方

執筆者：奥山正樹。環境庁自然保護局野生生物課鳥獣保護業務室。〒100 東京都千代田区霞ヶ関

2名以上が確認できた場合だけ記録する。

「鳥合わせ」の時点で記録するさいには、数字の後に+、-、±などの記号をつけて概数の程度を表しているが、今回の解析にはこれらは考慮しなかった。また、10年間のうち悪天候により中止した月が合計6回あった。なお、この探鳥会がはじまったのが1980年の

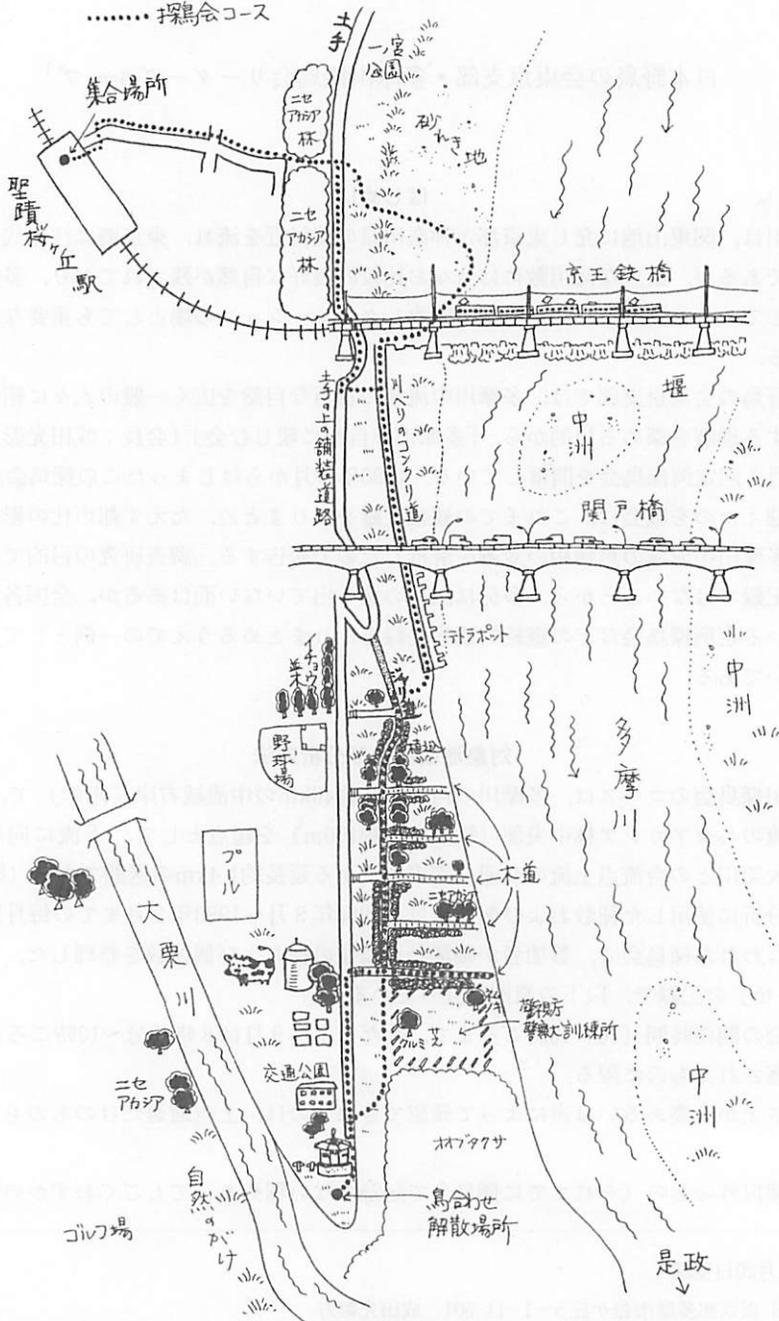


図1. 観察地域の概略図。

Fig. 1. Map of the observation area.

3月であったことから、経年変化を比較するうえでもちいる年度は、3月から翌年2月までとした。

結果および考察

1. 種数, 個体数の経年変化

1年間に観察された鳥類（明らかに飼育されていたものが逃げたと思われるものやドバトなど野生種でないものを除く）の種数は64~82種で、はっきりとした増減傾向は認められなかった（図2）。年による多少の増減は、おもに春秋の渡りの時期に通過する種をどれだけ観察したかによる違いであって、直接何らかの環境変化を表すものとは考えにくい。当地域は見通しのよい場所が多いことから、観察者の数や経験のちがいは観察記録の精度に大きな影響を与えていないと考えた。なお、10年間の総出現種数は115種であり、これは「東京都産鳥類目録」（東京都公害局 1975）の31%、「多摩川産鳥類目録」（東京都公害局 1974）の64%にあたる。渡りの型から見た内訳は、留鳥33種（29%）、夏鳥18種（16%）、冬鳥33種（29%）、旅鳥および迷鳥31種（27%）であった。

1年間に観察された総個体数は5,500~10,700羽であったが、探鳥会の年間開催回数にばらつきがあったため、月平均に換算して検討した（図2）。個体数についても明らかな増減の傾向は見られなかったが、年ごとにかなり変動していた。この変動は、個体数の大部分を占めるカモ類の増減によるところが大きかった。

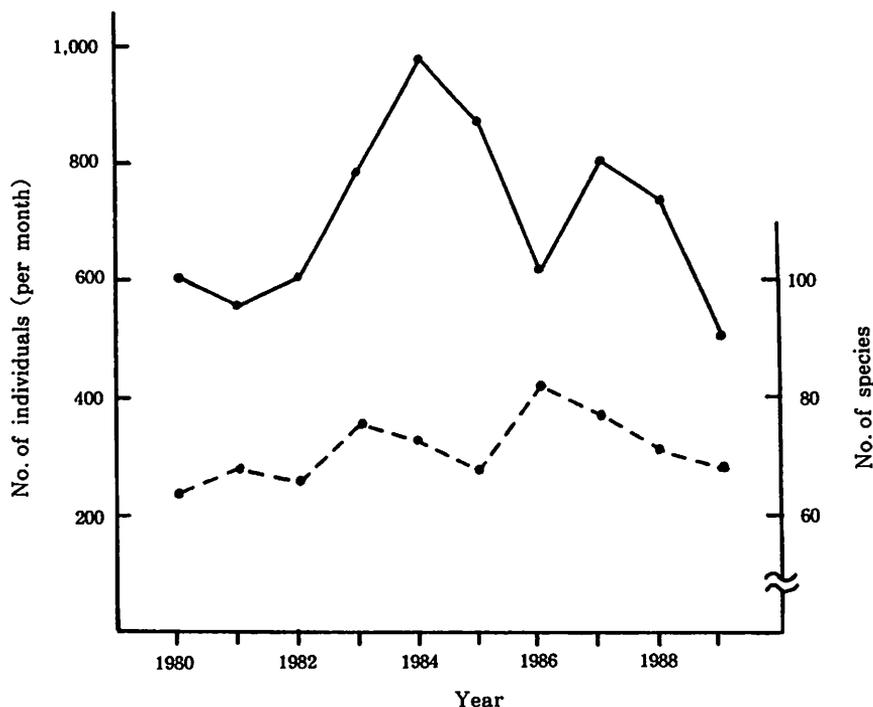


図2. 1年間に観察された種数（点線）と月平均個体数（実線）の経年変化（1980~1989年度）。

Fig. 2. Annual changes in the number of individuals (solid line) and species (broken line) at the middle basin of the Tama River (1980-1989).

2. 種数, 個体数の季節変化

当地域の鳥類は, 種数, 個体数ともに夏期に少なく冬期に多くなる, いわゆる冬鳥型の変動を示しており (図3, 図4), 繁殖地としてよりも越冬地としてよく利用されていることがわかる. この傾向は, 以前から, 多摩川流域全体についてもいわれており (東京都公害局 1974), 繁殖する小鳥類が少なく越冬する水鳥類が多い河川敷に共通する特徴だと思われる. また, 夏期 (6~8月) の個体数は次第に減少する傾向にあり (図4), 繁殖地としては以前にも増して利用されにくくなっていることが示唆された.

3. 水鳥相の変化

1) カモ類

10年間を通じて毎年観察されたカモ類は, マガモ, カルガモ, コガモ, ヒドリガモ, オナガガモ, ハシビロガモ, キンクロハジロ, ミコアイサの8種であり, ヨシガモ, ホシハジロ, スズガモなどは年によってごく少数が観察されるだけであった.

図5は種ごとに冬期 (12~2月) の最大確認個体数の経年変化を表わしたものである. 年変動が著しいのではっきりしたことはいえないが, オナガガモは1986年以降減少しているように見え, ミコアイサも1985年以降やや減少しているように思われる. 反対に増加傾向にあると思われるのはオカヨシガモであった.

カモ類の群集構造の変化は, 一般に富栄養化などの水質変化を反映していることが多いといわれる (羽田 1954). だが, 当地域内にある関戸橋での水質調査の結果は, BOD 75%値ではこの10年間はほぼ横ばいであり (多摩市生活環境部 1989), 環境基準値には達していないものの, 急激な水質の悪化はなかったといってよい. 湖沼については水質汚濁の指標としてハシビロガモが有効であるという報告があるが (浅間・山城 1987), ハシビロガモの顕著な増減もなかった (図5).

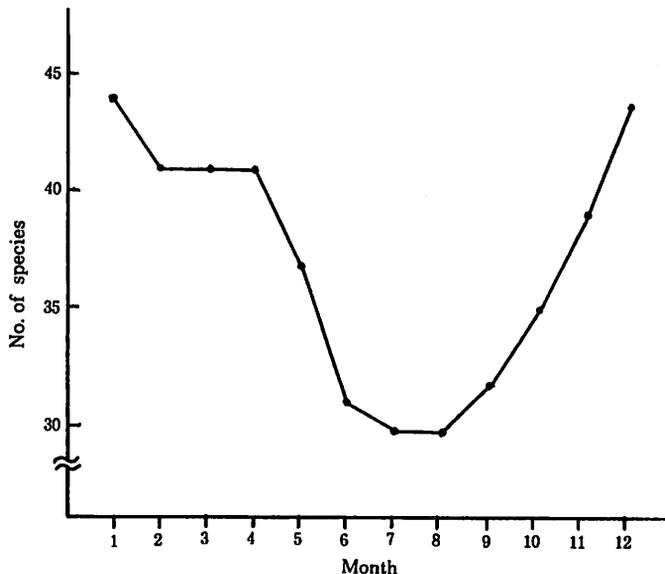


図3. 出現種数の季節変化 (1980~1989年度の平均).

Fig. 3. Seasonal change in the number of bird species at the middle basin of the Tama River (means of 1980-1989).

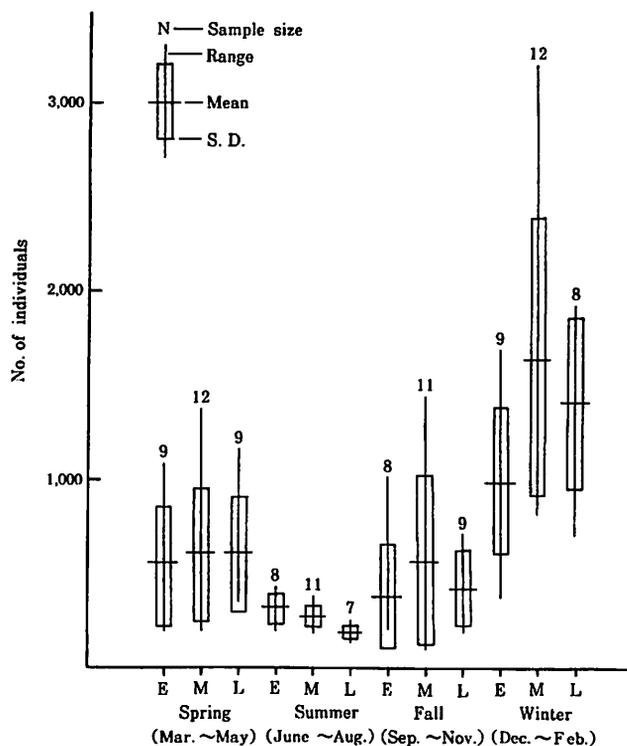


図4. 総個体数の季節別年次変化 (E: 1980~1982, M: 1983~1986, L: 1987~1989).

Fig. 4. Seasonal change in the number of individuals at the middle basin of the Tama River (E: 1980-1982, M: 1983-1986, L: 1987-1989).

また、カモ類の変動を議論するうえでは狩猟圧という人為的要因をさけることができないが、多摩川河川敷は、1969年に銃猟禁止区域に指定され、さらに1974年に鳥獣保護区の指定を受けている。したがってこの10年間では、直接的な狩猟圧は個体数変化にほとんど影響しなかったものと思われる。

ごく限られた地域におけるこのようなカモ類の増減は、渡来数や流域全体の個体数の変化を反映しているというより、むしろ局地的な利用のしやすさによって大きく影響されるのではないかと思われる。つまり、当地域のような河川敷内では、川の流れや中洲の形状などが流量の変化にともなって刻々と変わるため、カモ類の採食や休息に適した場所が移動したり消滅したりしやすい。また、中洲が河原とつながってしまい、人間が入りこめるようになると、急激に水鳥の数が減少する。しかし、このような変化は数値化することが困難なため、あくまで経験的な推察にすぎない。今後は川の流れの様子や人間の入りこみ状況なども同時に記録することが必要であろう。

2) サギ類

ゴイサギ、ササゴイ、ダイサギ、コサギ、アオサギの5種がほぼ毎年観察され、そのうちダイサギ、コサギ、アオサギはいずれも夏期よりも秋から冬にかけて個体数が多くなっており(図6)、この傾向はアオサギが最も顕著であった。ダイサギは全体に少数で変化が少なく、逆にコサギは変動が大きく6月や9~11月に多数の個体が観察されることが多

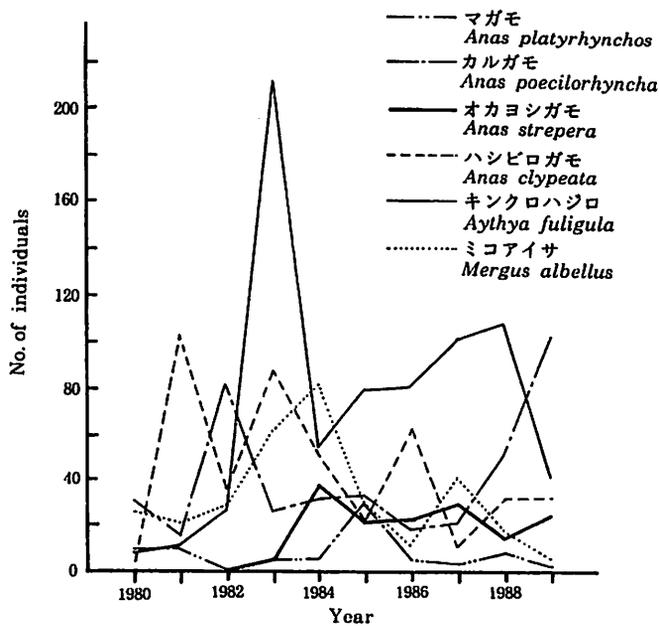
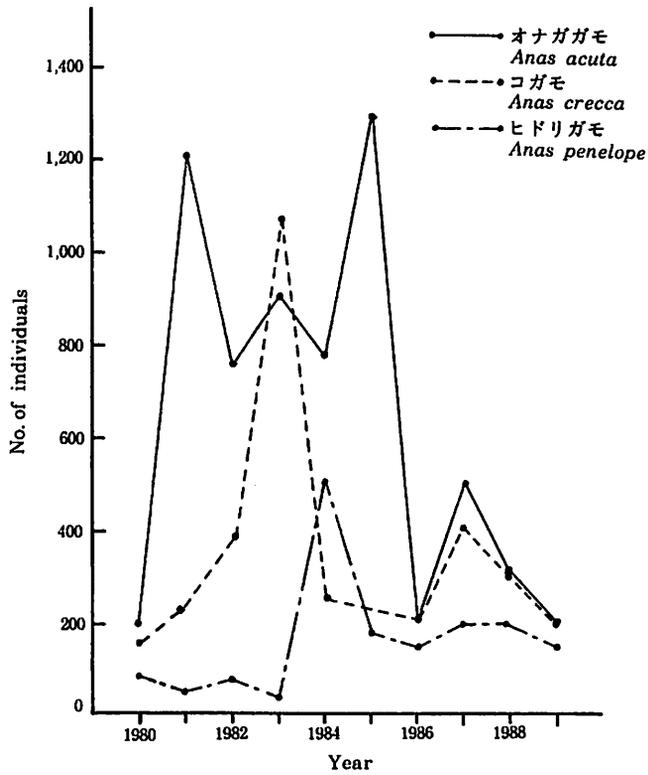


図5. カモ類の冬期(12~2月)最大個体数の経年変化.

Fig. 5. Annual changes in the maximum number of waterfowl species in winter (Dec.-Feb.) at the middle basin of the Tama River.

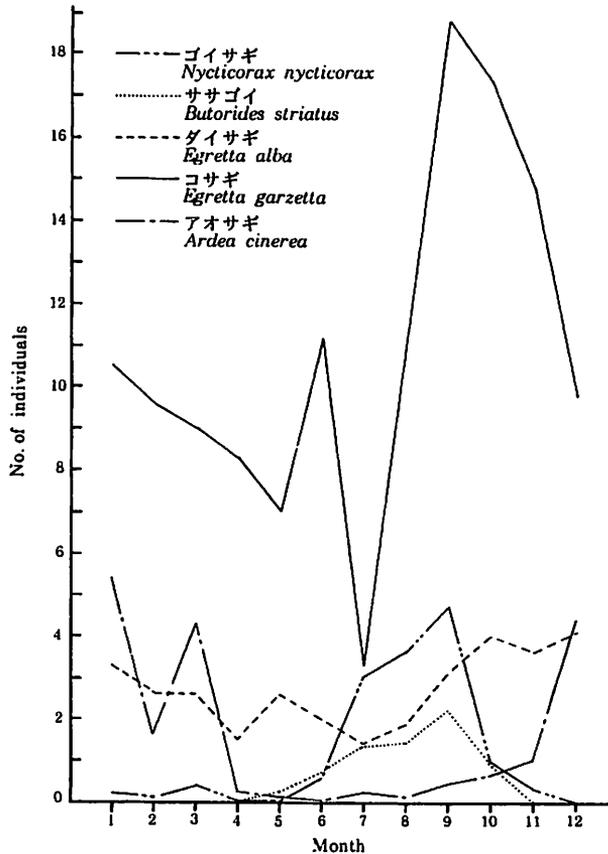


図6. サギ類の個体数の季節変化 (1980~1989年度の平均).

Fig. 6. Seasonal changes in the number of herons and egrets at the middle basin of the Tama River (means of 1980-1989).

かった。

当地域内にはこれらサギ類の繁殖地はなく、育雛期に採食のため飛来するような近隣の繁殖地も確認されていないことから、当地域を越冬地として利用している個体が多いと思われるが、コサギについては繁殖期前後の移動・分散期にも重要な役割を果たしていることがうかがえた。この時期、あるいは繁殖期に観察される個体ははたして繁殖しているのか、しているとすればどこで繁殖しているのか、今後解明すべき課題といえる。

反対に、ゴイスギやササゴイは、おもに夏~秋季にかけて多く観察されていた。この2種についても当地域内での営巣は確認されていないが、付近で繁殖している可能性は高いと思われる。しかし、おもに夜間に活動するので、午前中に観察した今回の記録から考察することはむずかしい。

サギ類については、もともとの観察個体数が少ないため、年間の最大個体数の経年変化を見ても(図7)、ササゴイについてはやや減少傾向が認められたものの、その他の種には明らかな増減傾向は見られなかった。ササゴイについても、観察個体数自体が少ないうえ、物かげに隠れる習性上見落としが少なくないと思われることから、この記録だけで断定することはできない。

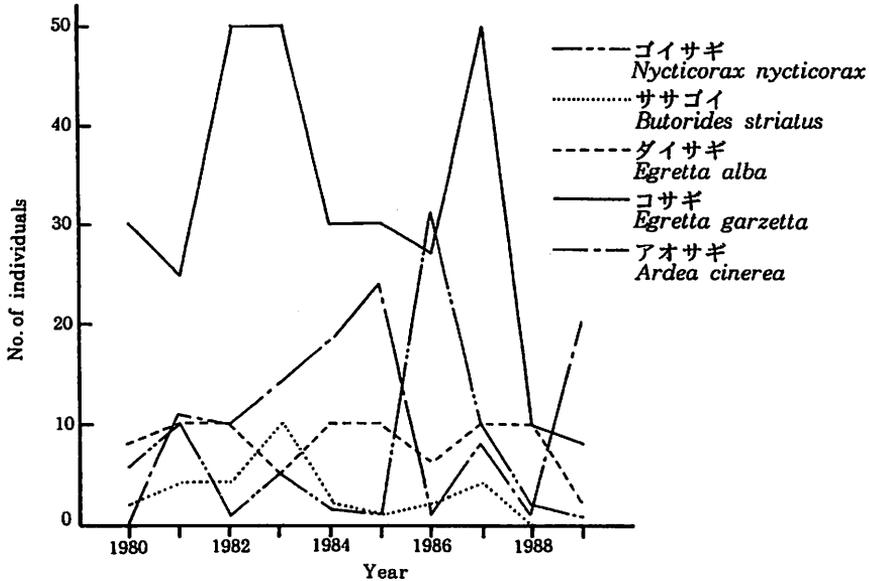


図7. サギ類の年間最大個体数の経年変化。

Fig. 7. Annual changes in the maximum number of herons and egrets at the middle basin of the Tama River.

この地域のダイサギ、コサギ、ササゴイはおもにオイカワを採食している（東条一史私信）。多摩川全体でのオイカワの漁獲量はほぼ横ばいであるものの（農林水産省統計情報部 1981-1988）、中流域（多摩川原橋、浅川合流点）では減少している可能性が示唆されている（環境庁自然保護局 1979, 1987a）。一般にオイカワは、河川改修の進行にともなってアユなどに比べ優勢になっていくが、さらに進むとオイカワよりコイの方が優勢になる場合もあるとていわれている（水野・御勢 1972）。当地域内でこの10年間に大規模な河川改修はなかったが、多摩川全体での河岸の人工化率は、1979年の14.1%から1984年には15.5%に増加した（環境庁自然保護局 1987b）。

また、コサギが都市河川に適応しているのは、コンクリート護岸が市街地と河川敷を隔離するため逆に安心感を与えているからだという説もあり（唐沢 1987）、今後も護岸の変化との関係に注目していくべきであろう。

3) シギ・チドリ類

図8は、シギ・チドリ類（チドリ科、シギ科に属するもの全種）について、渡りの時期である春（3～5月）と秋（8～11月）それぞれの各種の最大個体数の合計を経年変化で表したものである。この中には冬鳥であるハマシギ、タシギや、留鳥であるコチドリ、イカルチドリ、イソシギなども含めている。

種数は春5～9種、秋4～9種と年によって変動があるが、これはエリマキシギ、アオアシシギ、タカブシギ、チュウシャクシギなど、比較的珍しい種が観察されたかどうかによるものである。このうち、エリマキシギ、アオアシシギは秋にのみ観察された。また、比較的個体数の多いムナグロは、春には1981年と1987年しか観察されなかったのに対し、秋には1981年以後毎年観察されており、個体数も秋の方が多かった。

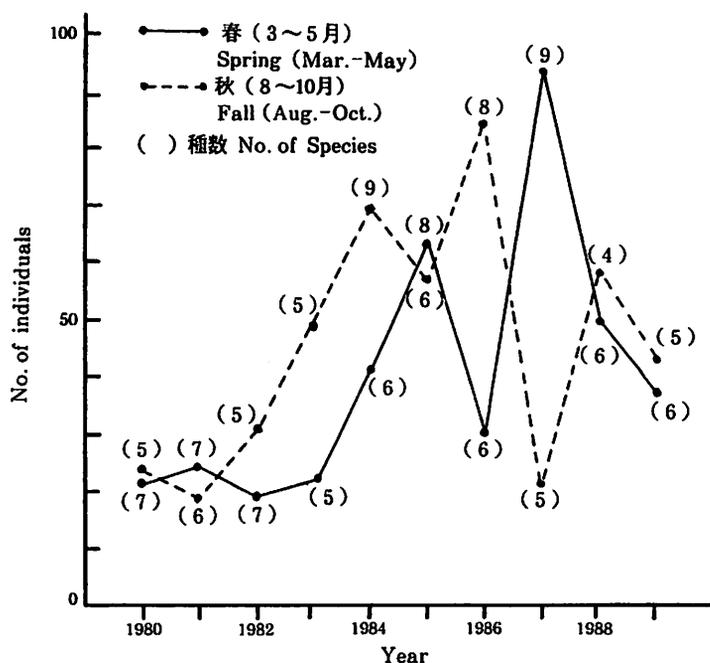


図8. シギ・チドリ類の春(3～5月)と秋(8～10月)の最大個体数合計の経年変化。

Fig. 8. Annual changes in the number of waders in spring (Mar.-May) and fall (Aug.-Oct.) at the middle basin of the Tama River.

同じ年の春と秋の個体数にはとくに関係が見られなかったが、秋の個体数と翌年の春とがほぼ同じ増減を示す傾向があった。これは、シギ・チドリ類の個体数が中洲や河岸の形状に影響を受け、その形状は主として流量変動の大きい夏季に変化し、冬季には変化が少ないことを示しているのではないかと考えられる。実際に夏季には、台風などによる増水で中洲がほとんど消失したり、逆に中洲が河岸とつながってしまったりすることがよく見受けられた。

しかし、シギ・チドリ類などの旅鳥の場合は、年によって渡りのピークの時期が前後することから、その経年変化を議論するには月に1度の観察記録では不十分であり、渡りの時期のより集中的な調査が不可欠である。また、渡りの中継地としての利用しやすさに変化がなくても、繁殖地および越冬地の環境が変化すれば、個体数は大きく変わることが予想され、その面での情報収集も必要であろう。

また、河原で繁殖していると思われるコチドリ、イカルチドリについて、繁殖期(6, 7月)の月平均個体数の経年変化は大きな変動は認められなかった(図9)。ここで2か月の平均値をとったのは、成鳥・幼鳥の区別を記録していないためのばらつきをおさえ、繁殖状況を代表させるためである。

これらチドリ類の繁殖は、河原に人が入りこむようになるとまっ先に影響を受けるものと考えられ、最近ではオフロードバイクによる繁殖の妨害が問題になっているところも少なくない。しかし、当地域では、過去10年間において、この種の人為的な影響が深刻化している傾向は認められなかった。実際に、やや下流の大栗川合流点南岸付近などでは、オ

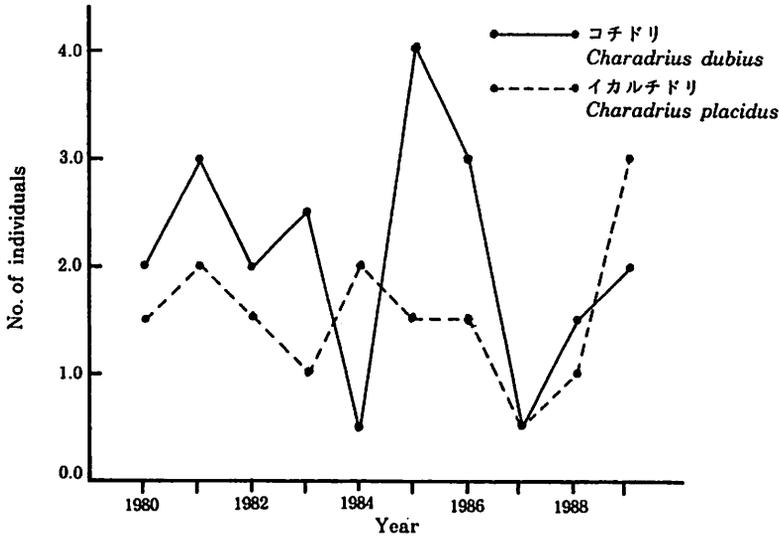


図9. チドリ類2種の繁殖期(6, 7月)月平均個体数の経年変化。

Fig. 9. Annual changes in the mean number of two breeding plover species at the middle basin of the Tama River in June and July.

フロードバイクの入りこみにより裸地化してしまった草地が見受けられるが、当地域内では、頻繁にオフロードバイクが見られるということはない。

4) カモメ類・アジサシ類

この地域で観察されるカモメ類の中で最も個体数が多いのはユリカモメであった(図10)。年間の最大個体数に関する限り、1984年をピークに減少しているものの、10年間を通じた傾向は明らかではなかった。ユリカモメは、全国的に都市河川への進出が見られており、多摩川でも1960年代後半から観察される数が増加し(東京都公害局 1974)、現在は河口から57kmの範囲まで越冬期を通じて観察されている(高木 1989)。当地域の場合、採食する個体よりも上空を通過するだけの個体が多く、東京湾でねぐらを取り、多摩川のさらに上流で採食しているものと考えられる。多摩川での大きな採食場所のひとつは、当地域からわずか1kmほど上流の浅川合流点にあり、この場所では日中を通して観察されることから(高木 1989)、当地域で観察される個体はこの浅川合流点へ遡行、あるいは下る途中の個体が多いのではないかと推察される。しかし、ユリカモメの食性や環境利用の特性にはいまだ不明な点が多い。

その他、中・大型カモメであるセグロカモメ、ウミネコの2種がいずれも1982年から観察されるようになった。ウミネコは増加傾向はないものの1988年を除き毎年観察された。セグロカモメも1984年以降毎年観察されており、最大個体数も増加傾向が見られた(図10)。

月別平均出現数を見ると(図11)、ユリカモメは9~5月に見られピークは12月、1月にあるが、セグロカモメは1~4月に見られピークは3月、ウミネコは8~4月までに見られピークは4月と10月にあった。もともとの出現数が少ないため明確ではないが、ユリカモメが越冬地の行動域として利用していると思われるのに対し、セグロカモメは春の、ウミネコは春秋の移動・分散期におもに利用しているようであった。

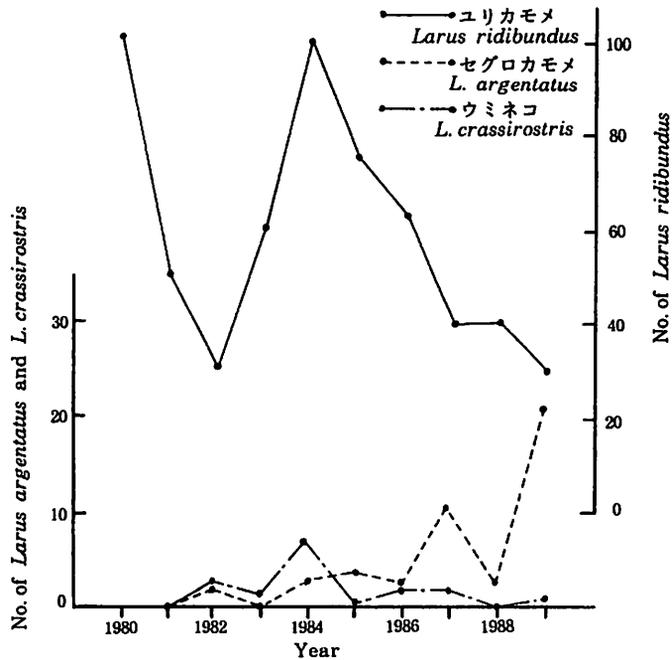


図10. カモメ類の年間最大個体数の経年変化.

Fig. 10. Annual changes in maximum number of gulls at the middle basin of the Tama River.

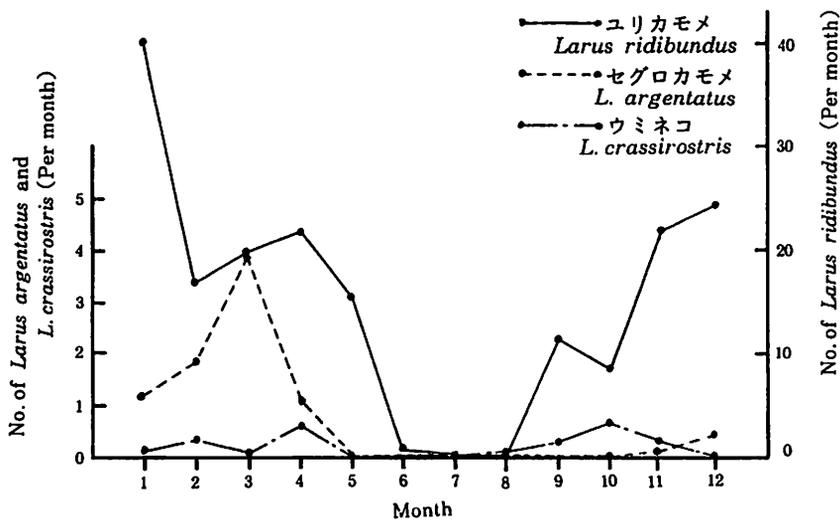


図11. カモメ類の個体数の季節変化 (1980~1989年度の平均).

Fig. 11. Seasonal changes in the number of gulls at the middle basin of the Tama River (means of 1980-1989)

セグロカモメ、ウミネコの多摩川上流への進出が見られるようになったのは、ユリカモメと比較して最近のことであり、個体数も少ないため、両種とも上流における食性や環境

利用について十分調べられてはいない。なぜ近年川を遡行するようになったのか、どんな環境の変化が関係しているのか、ユリカモメと比較するうえでも興味深い。

アジサシ類は、1982年まで毎年9月にアジサシが、1985年まで5～9月にコアジサシが少数観察されていたが、それ以降の記録がなかった(図12)。コアジサシは、以前は多摩川中流域でも繁殖していたが、直接的な人害(巣がもち去られる)や、人間の入らない繁殖場所がなくなったことが原因で、1970年以降は繁殖が確認されなくなった(東京都公害局 1974)。その後は1985年までごく一部の個体が採食場所として利用していたにすぎないが、それらも現在ではまったく見ることができなくなった。

アジサシは以前から旅鳥として渡り途中に利用するだけであったが、こちらも同様に観察されなくなったことから、当地域はアジサシ類にとって、繁殖地としてだけでなく渡り途中の採食場所や休息場所としても利用できなくなったといえる。これが食物資源の減少によるのか、あるいは休息場所の喪失などによるのかは断定できない。しかしコアジサシの例は、人為的な影響により繁殖できなくなった種が、やがて姿すら見せなくなるという顕著な一例だといえるであろう。

5) カワセミ類

当地域では、この10年間、カワセミが毎年留鳥として観察されており、さらに1987年からはヤマセミも観察されるようになった。

多摩川水系のカワセミは、1960年代に急激に上流へと分布が後退し、秋川合流点より下流ではほとんど姿が見られなくなったが、1970年代後半～1980年代にかけて再び下流へ分布を広げたことが知られている(日本野鳥の会東京支部研究部 1980)。当地域内の大栗川合流点付近でも、探鳥会が開始された1980年3月からほぼ毎回観察され、同年に繁殖が確認された後は(日本野鳥の会東京支部研究部 1980)、毎年繁殖しているようである。同時に観察した個体が幼鳥を含めて4羽を越えないことから、おそらく当地域内に定着して繁

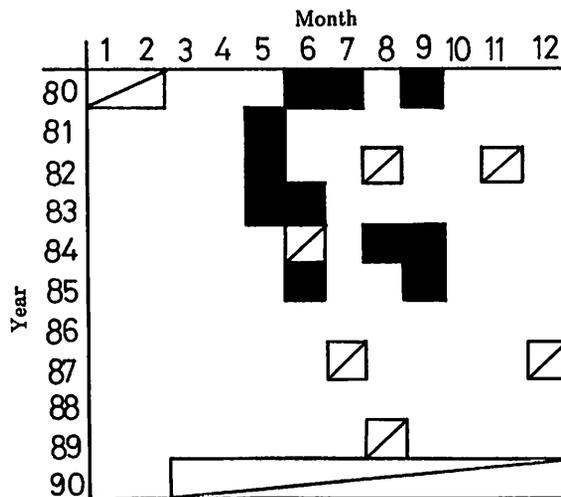


図12. コアジサシの出現記録(■). □は探鳥会が行なわれなかった月。

Fig. 12. Occurrence of Little Terns *Sterna albifrons* in different years and seasons.

殖しているのは1つがいだと思われる。1980年当初は一時的な現象ではないかとも思われたが、その後10年間繁殖し続けており、都内のほかの地域でも都心に繁殖分布を広げていることから（日本野鳥の会東京支部研究部 1983）、当地域では完全に再定着したといえるであろう。

一方、ヤマセミは、1987年4月の初記録以来、毎年4～9、10月にかけて1～2羽が観察されるようになった。ここで確認された個体は、入れ替わっている可能性はあるものの毎年1つがいであり、1987年に繁殖に成功して以来（津戸 1987）、1990年現在まで3年連続して繁殖したようである。このことより、当地域は今のところ繁殖地として好適な環境を維持しているといえる。

ヤマセミの繁殖地が当地域のような大都市周辺部で見られる例はきわめて少ないと思われる。ヤマセミが繁殖するためには、食物となる魚が豊富に生息していること、営巣できる高い崖があること、休息に適した人の入りこまない林があることなど、いくつかの条件が考えられるが、当地域はかろうじてこれらの条件を満たしている、大都市周辺部では数少ない場所であることを示しているといえよう。

なお、この近くではほかにヤマセミの生息に適した環境が見あたらないことから、これらの個体が非繁殖期にはどこにいるのか、またここで巣立った個体がどこに分散しているのか、興味深い点である。

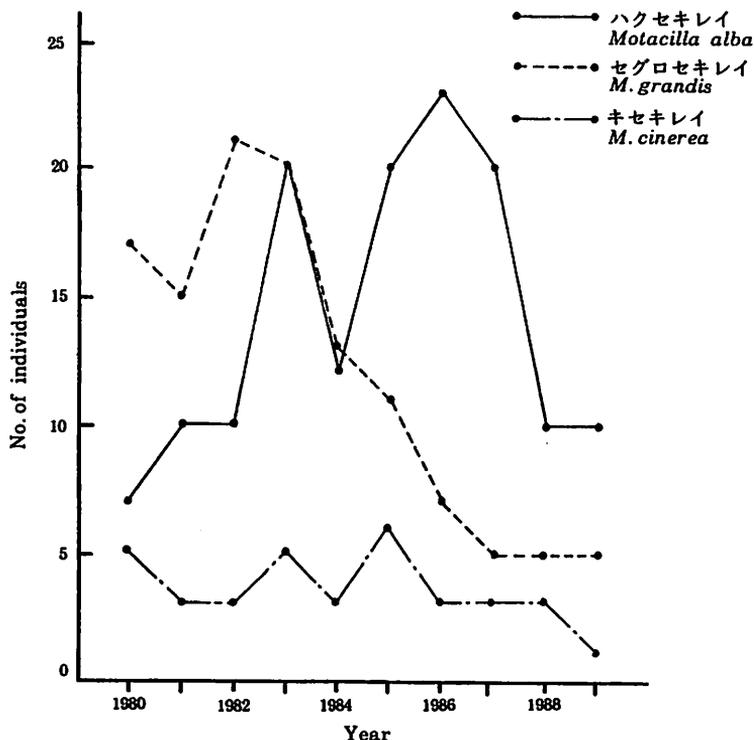


図13. セキレイ類の年間最大個体数の経年変化。

Fig. 13. Annual changes in the maximum number of wagtails at the middle basin of the Tama River.

6) セキレイ類

当地域には現在、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイの3種が周年生息している。これら3種の年間最大個体数を見たところ(図13)、ハクセキレイは、1986年までは増加傾向だったが、それ以後は減少傾向にあった。また、キセキレイには大きな変化は見

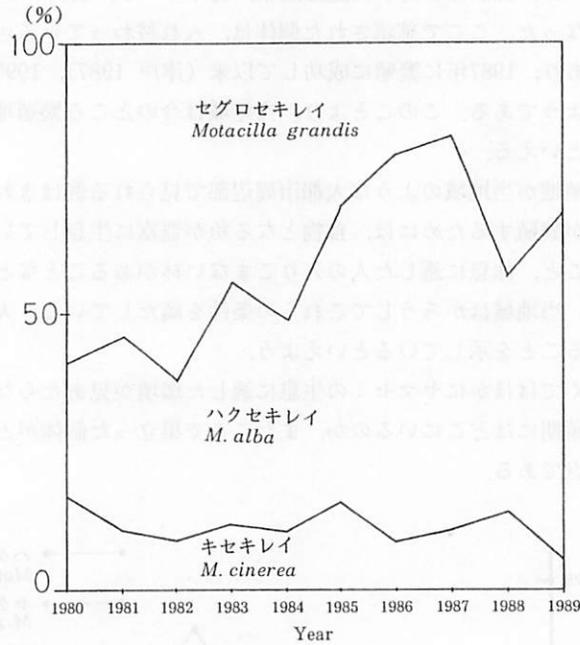


図14. セキレイ類3種の構成比の経年変化。

Fig. 14. Annual changes in the ratio among three wagtail species at the middle basin of the Tama River.

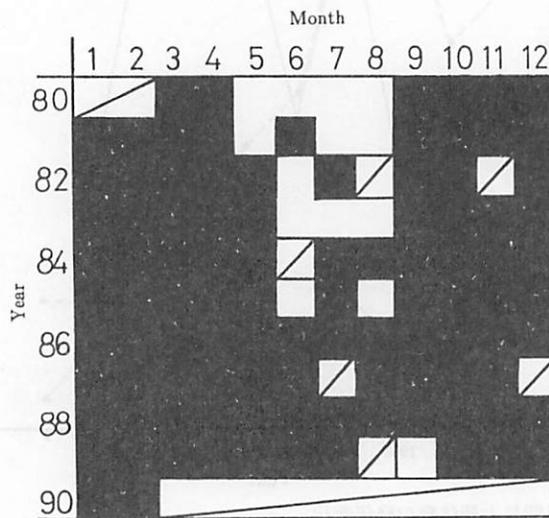


図15. ハクセキレイの出現記録(■). □は探鳥会が行なわれなかった月。

Fig. 15. Occurrence of White Wagtails *Motacilla alba* in different years and seasons.

られなかったが、セグロセキレイに顕著な減少傾向が見られた。図14は、セキレイ3種の合計に占めるそれぞれの割合（いずれも最大個体数）を年度ごとに示したものである。キセキレイの割合はほぼ横ばいであるが、セグロセキレイとハクセキレイはこの10年間で完全に逆転している。ハクセキレイは、1984年前後までは繁殖期にはほとんど観察されていなかったが、その後はほぼ周年観察されるようになった（図15）。これは、従来東北地方でしか繁殖していかったこの種が1970年代前半から急速に繁殖分布を拡張してきている現象の一環であり、多摩川中流域でも1978年ごろから繁殖記録があるが（中村 1980）、本地域で周年見られるようになったのは1984年前後からである。ただし、これはあくまでこの時期にも見られたという記録であって、繁殖を確認しているものではない。しかし、この探鳥会の観察記録だけからもハクセキレイの分布拡大とセグロセキレイの減少傾向を読みとることができた。

4. 草原性、森林性鳥類相の変化

対象地域が河川沿いであることから、観察される鳥類は水鳥が中心となっているが、河川敷内にはアシ原を中心とした低草原が広がっており、ここを利用している草原性鳥類も少なくない。また、コースの始点周辺のニセアカシア林と終点周辺の大栗川南岸の河岸林には、個体数は少ないものの森林性鳥類も生息している。今回は、これらの草原、森林性の種から、繁殖期（6～8月）、越冬期（12～2月）のそれぞれについて、代表的な種を3種ずつ選び、経年の増減傾向を検討した。

1) 繁殖期の草原性鳥類（ヒバリ、オオヨシキリ、セッカ）

この3種の選定理由は、河川敷の草地でしか見られず、毎年複数のさえずりが確認され

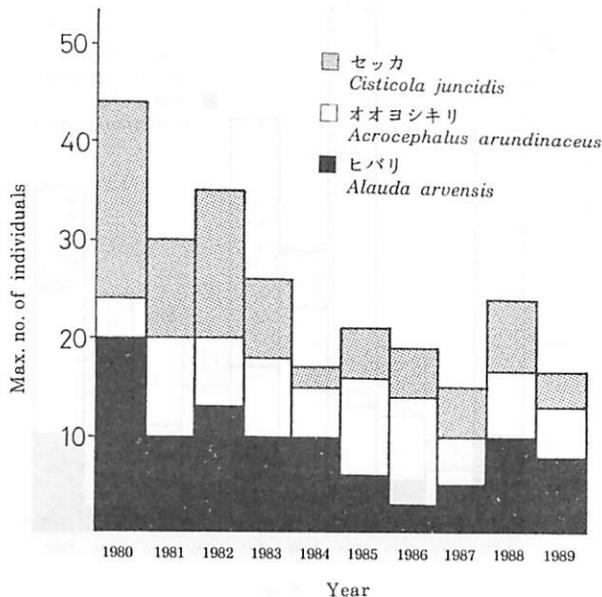


図16. 繁殖期（6～8月）の草原性鳥類3種の最大個体数の経年変化。

Fig. 16. Annual changes in the maximum number of grassland bird species in summer (June-Aug.) at the middle basin of the Tama River.

ている点である。3か月間の最大個体数は、多少のばらつきはあるものの、3種のうちセッカとヒバリはこの10年間で減少している傾向にあった(図16)。当地域は草原性鳥類の繁殖地として適さなくなってきたことがうかがえる。この原因としては、河川敷の整地が進み、人間の入りこまない草度が少なくなっていることなどが考えられる。この10年間で当地域内における比較的大規模な整地事業としては、1985年に河川敷での公園建設に伴い散策路がつけられたのがあげられるが、この年にとくに激減しなかったことから、この散策路建設による直接的な影響があったとは考えにくい。印象としては、むしろ河川敷の利用者が増えたことなどによって次第に減少していると考えるのが適当と思われる。通常人が入りこみにくいアシ原で営巣するといわれるオオヨシキリよりも、それ以外の草地にも営巣する2種の方が減少傾向が顕著であることも、原因が人間の進入にあることを示唆しているのではないかとと思われる。

2) 越冬期の草原性鳥類(ツグミ, ホオジロ, カシラダカ)

この3種は冬期に草地で観察されることがほとんどであったことから選定したが、いずれも年による個体数のばらつきが大きく(図17)、10年間の増減傾向は明らかではなかった。

一般にホオジロ、カシラダカは越冬期にはおもに植物の種子を食べることから自然の草地をよく利用するのに対し、ツグミの方は昆虫などをよく食べることから、芝地やグラウンドなども利用していた。また、当地域ではアシ原を焼きはらった直後にツグミがムクドリやタヒバリなどととも採食しているのがよく観察される。3種にはこのような環境利

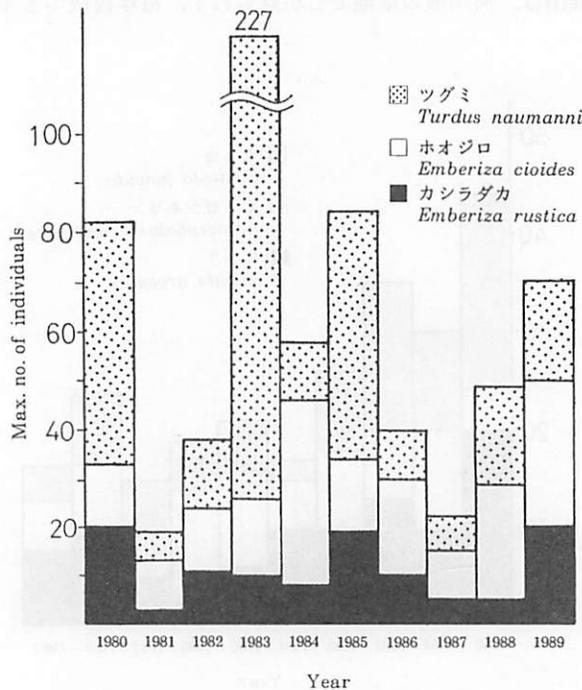


図17. 越冬期(12~2月)の草原性鳥類3種の最大個体数の経年変化。

Fig. 17. Annual changes in the maximum number of grassland bird species in winter (Dec.-Feb.) at the middle basin of the Tama River.

用の違いはあるものの、この10年間に当地域内でグラウンドや芝地の大規模な造成はなかったことから、これらの個体数には大きな増減なく、焼きはらいなどによる一時的な環境の変化が個体数のばらつきの主要因だったのではないかと考えられる。

3) 繁殖期の森林性鳥類 (キジバト, ヒヨドリ, シジュウカラ)

この3種は、林内で繁殖している可能性が高いものという基準で選出したが、確認された個体数が少なく、年によるばらつきが大きかったため (図18), 増減の傾向は明らかではなかった。またこれらの種については、繁殖期であっても、声で確認したのではなく姿で確認した場合も多く、しかもさえずりの有無などについては記録していなかったため、今回の記録だけでは繁殖場所として利用されているかどうかの評価には結びつけにくい。ただし、この10年間に限って言えば、この地域の林の大規模な伐採はなかった。

4) 越冬期の森林性鳥類 (ウグイス, シメ, オナガ)

この3種は、越冬期におもに林内で観察されていることから選定した。これらについても、やはり年によるばらつきが大きく、増減傾向は明らかでなかったが、とくにシメはウグイス、オナガと比べて年による変動が大きかった (図19)。シメは、ほかの2種と違って完全に林に依存しているわけではなく、樹木が近くにあれば河川敷の草地にも下りて採食していた。さらに前述した火入れ跡などでも少数が観察されることがあった。シメの個体数変動は、こうした林縁近くの環境の変化によるものが大きいと思われる。また、シメはほかの2種と違って渡り鳥であることから、繁殖地の環境変化などによって渡来数そのものに変動があった可能性も考えられる。

5. 10年間の消滅種と参入種

当地域におけるヤマセミの参入とコアジサシの消滅についてはすでに述べたが、これ以外にもこの10年間で見られなくなったり、あるいは新たに見られるようになった種がいく

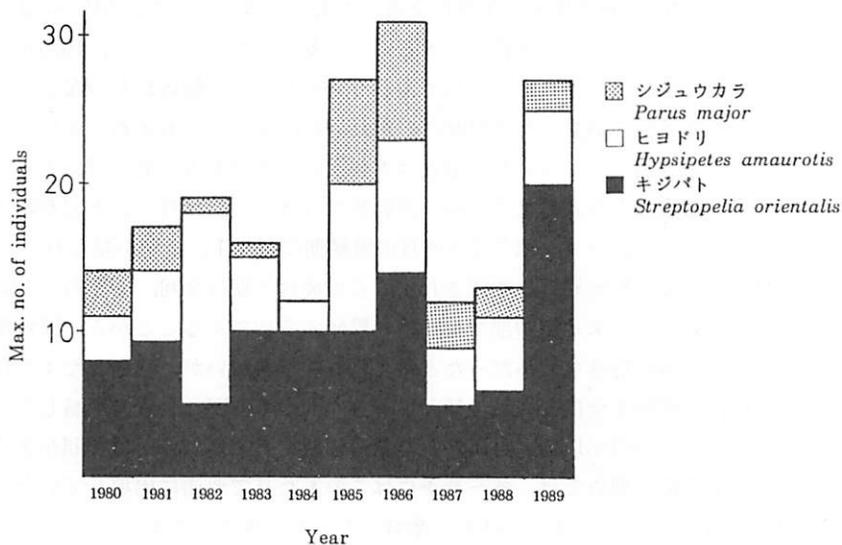


図18. 繁殖期 (6~8月) の森林性鳥類3種の最大個体数の経年変化。

Fig. 18. Annual changes in the maximum number of forest bird species in summer (June - Aug.) at the middle basin of the Tama River.

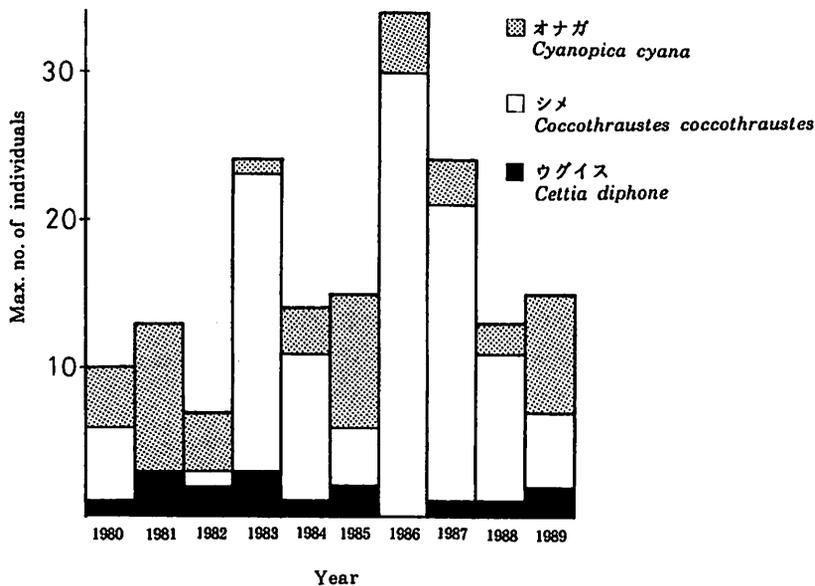


図19. 越冬期 (12~2月) の森林性鳥類3種の最大個体数の経年変化.

Fig. 19. Annual changes in the maximum number of forest bird species in winter (Dec.-Feb.) at the middle basin of the Tama River.

つかあった。以下にそれぞれの種について探鳥会での観察状況を述べる。

1) 消滅種

コアジサシのほかに、クサシギとホオアカをあげることができる。

クサシギの個体数は、以前から1, 2羽であったが、1984年までは9~5月の間で毎年観察されていた(図20)。観察場所は多摩川支流の大栗川がほとんどで、川岸の草かげでじっとしているか、歩きまわって採食していることが多かった。ところが、1984年5月を最後に観察されなくなった。目立たない鳥であるうえにもともと個体数が少なかったこともあり、完全に当地域から消滅したとは断言しがたいが、少なくとも定着していないといえる。消滅の原因は明らかでないが、最近は大栗川の河原でも人の姿を目にすることが多くなっており、頻繁に人が入るようになった影響が大きいのではないと思われる。

ホオアカは、合流点付近のアシ原で4~8月の繁殖期に毎年1, 2羽が見られていたが(図21)、1984年を最後に繁殖期には確認されず、その後は冬期に3回、単発的に1羽ずつ観察されただけである。元来本州中部では高地で繁殖する種であることから、繁殖期にここに渡来していた個体が特殊な個体だったと考えられなくもないが、前述したように繁殖期の草原性鳥類は当地域で全体的に減少傾向にあり、同様の要因によって消滅したと考えるのが妥当であろう。1984年以前にもはたして繁殖に成功していたのかは疑問があるが、1970, 1971年の東京都の調査では、冬~春季にはこのあたりで普通に出現していたとあり(東京都公害局 1974)、当時と比べ全体的に激減したことは確実である。

2) 参入種

ヤマセミのほかに、カワウとコゲラをあげることができる。

当地域で見られるカワウは、上野動物園内の不忍池か、最近集団繁殖地が形成されてい

る浜離宮からやってくる個体であり、探鳥会では、1985年の3月にはじめて記録された(図22)。日本野鳥の会東京支部に報告のあったこの周辺での観察記録も、1985年2月16日が最初であり(日本野鳥の会東京支部 1985)、ここまで遡行するようになったのは、ほぼこの時期であるといえる。その後、1986年には観察されなかったものの、1987年以後は観察される回数が増え、現在ではほぼ1年の多くの時期に見られる。とくに多数観察されたのは2、3月であり、不忍池での繁殖期から分散期にあたっている(福川 1981)。しかし当地域では、上空を通過する個体が多いため、休息場所や採食場所としてよく利用されて

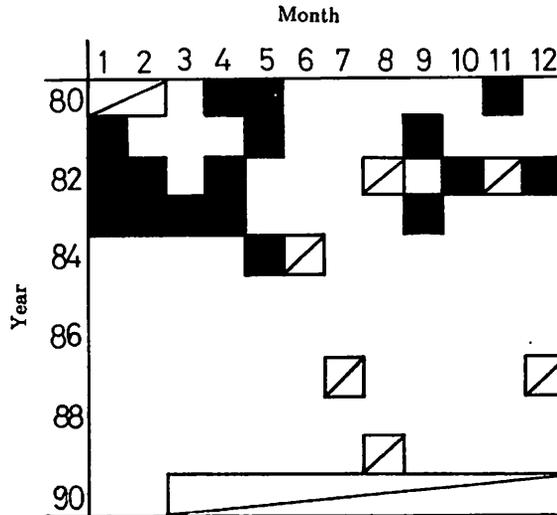


図20. クサシギの出現記録 (■). □は探鳥会が行なわれなかった月。

Fig. 20. Occurrence of Green Sandpipers *Tringa ochropus* in different years and seasons.

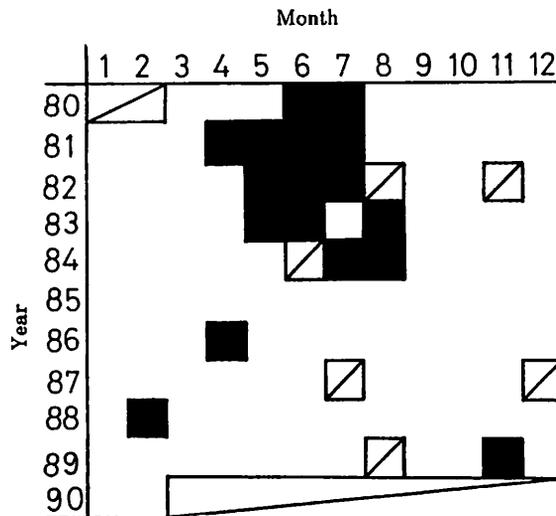


図21. ホオアカの出現記録 (■). □は探鳥会が行なわれなかった月。

Fig. 21. Occurrence of Gray-headed Buntings *Emberiza fucata* in different years and seasons.

いるとはいえない。

最近多摩川でカワウの個体数が増加したことから、アユに対する食害が問題となっているが、採食は早朝であり、奥多摩や秋川まで進出しているといわれることから（1990年7月6日 読売新聞夕刊）、採鳥会ではおもに、早朝に上流で採食した個体が下流方面に帰っていくところを観察していると思われる。

カワウが上流に遡行するようになった原因としては、集団繁殖地が手厚く保護されてい

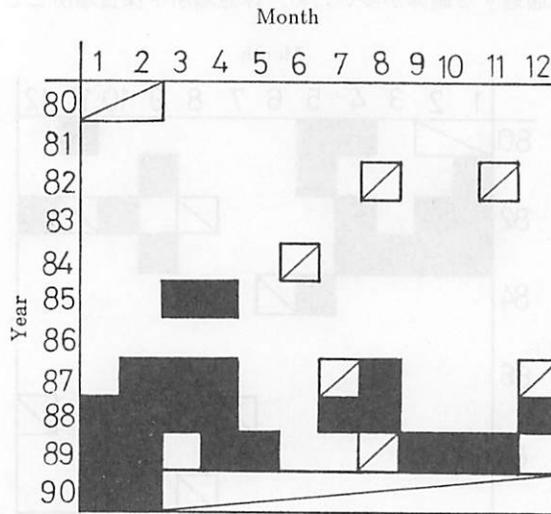


図22. カワウの出現記録 (■). □は採鳥会が行なわれなかった月.

Fig. 22. Occurrence of Great Cormorants *Phalacrocorax carbo* in different years and seasons.

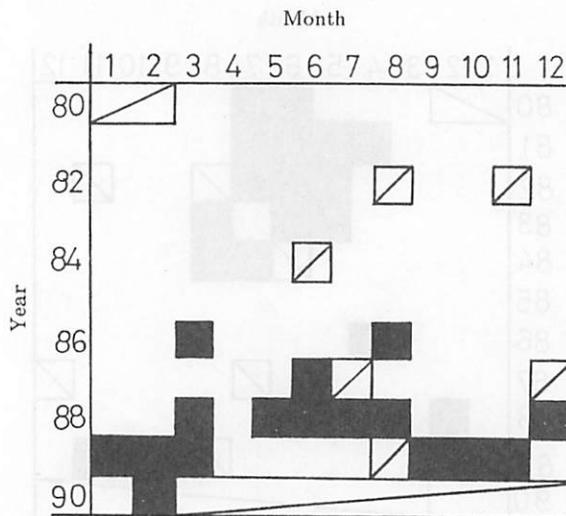


図23. コゲラの出現記録 (■). □は採鳥会が行なわれなかった月.

Fig. 23. Occurrence of Japanese Pigmy Woodpeckers *Dendrocopos kizuki* in different years and seasons.

るのに対し、以前からの採食場所である東京湾岸の採食環境が悪化していることなどが考えられ、今後も遡行する個体は増加していくと予想される。食害問題の解決にあたっては、詳細な食性や行動の調査を行なったうえで検討する必要があるだろう。

コゲラは、東京都内では1980年代に入ってから平地部の林にも生息するようになり、1985年には郊外の住宅地に定着したといえる状態になった(川内 1986a)。探鳥会では、1986年の3月に初記録があり(図23)、その後よく観察されるようになり、1988年には繁殖期を通して見られた。観察地点は、コース始点付近のニセアカシア林であり、繁殖している可能性もあるものの、巣穴の発見や巣立ちビナの確認はされていない。

コゲラが都市林へ進出している原因としては、従来の生息地の森林が減少していることよりも、都市の緑地や公園の樹木が成長し、営巣に適した枯れ枝、枯れ木が増えてきたことが大きいと考えられており(川内 1986b)、森林性鳥類が都市環境へ適応した顕著な例として今後の動向が注目されている。このニセアカシア林も幅約20m、長さ約100m程度の小さな林であるが、はたしてここに定着し、繁殖できるのか興味深いところである。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、日本野鳥の会研究センターの樋口広芳博士、金井裕主任研究員には懇切なご指導をいただいた。また、農林水産省森林総合研究所の東条一史氏、上越教育大学修士課程の高木武氏、東京都農林水産部林務課の曾我千文主事には、それぞれご専門の分野での貴重な情報を提供していただいた。ここにお礼を申し上げたい。最後に、この探鳥会を10年間にわたり支えてくださった歴代リーダーの方々と、観察記録の整理にご協力下さったすべての参加者の皆様にこの場をお借りして厚く感謝の意を表したい。

要 約

多摩川中流域において1980年3月から毎月1回行なっている定例探鳥会の観察記録を10年間分とりまとめ、鳥類相の変遷を解析することを試みた。おもな結果は以下のとおりであった。

1. 総出現種数は115種で、渡りの型から見た内訳は、留鳥33種(29%)、夏鳥18種(16%)、冬鳥33種(29%)、旅鳥および迷鳥31種(27%)だった。
2. 当地域は、越冬地としての利用種、利用個体が多いが、繁殖地としては以前にも増して利用個体数が減少している。
3. カモ類では、オナガガモ、ミコアイサがやや減少傾向、オカヨシガモがやや増加傾向にあるように思われた。
4. アジサシ類は1986年以後は周年を通じまったく観察されなくなった。
5. セグロセキレイは減少傾向にあり、ハクセキレイとセグロセキレイの割合がこの10年で逆転した。
6. 繁殖期の草原性鳥類は減少傾向にあった。
7. クサシギ、コアジサシ、ホオアカはこの10年間に姿を消し、反対に、カワウ、ヤマセミ、コゲラが新たに見られるようになった。

引用文献

- 浅間茂・山城隆. 1987. ガンカモ類とCOD値との関係. *Strix* 6: 96-102.
 唐沢孝一. 1987. マンウォッチングする都会の鳥たち. 草思社, 東京.

- 環境庁自然保護局. 1979. 第2回自然環境保全基礎調査 河川調査報告書 (東京都). 環境庁, 東京.
- 環境庁自然保護局. 1987a. 第3回自然環境保全基礎調査 河川調査報告書 (関東版). 環境庁, 東京.
- 環境庁自然保護局. 1987b. 第3回自然環境保全基礎調査 河川調査報告書 (全国版). 環境庁, 東京.
- 川内博. 1986a. 市街地の林に出てきたキツキ. ユリカモメ 364: 6.
- 川内博. 1986b. 東京の市街地にキツキが来た. 野鳥 484: 22-23.
- 高木武. 1989. ユリカモメの採食活動と場所利用. 東京農工大学農学部卒業論文.
- 多摩市生活環境部. 1989. 多摩市内の河川・池の水質とそこに生息する水生生物. 多摩市, 東京.
- 津戸英守. 1987. 多摩川中流域で繁殖したヤマセミ. ユリカモメ 384: 6-7.
- 東京都公害局. 1974. 自然環境保全に関する基礎調査報告書. 東京都, 東京.
- 東京都公害局. 1975. 東京都産鳥類目録. 東京都, 東京.
- 中村一恵. 1980. ハクセキレイの本州侵入について. 野鳥 406: 38-42.
- 日本野鳥の会東京支部研究部. 1980. 復活したカワセミ. ユリカモメ 298: 14.
- 日本野鳥の会東京支部研究部. 1983. 都内で繁殖したカワセミ. ユリカモメ 327: 10-11.
- 日本野鳥の会東京支部. 1985. 鳥信. ユリカモメ 353: 11.
- 農林水産省統計情報部. 1981-1988. 漁業・養殖業生産統計年報. 農林水産省, 東京.
- 羽田健三. 1954. 内水面に棲息する雁鴨科鳥類に於ける生態・Kineto-adaptation 並に Allometry に関する研究. I 湖沼標式を指標する群集としての棲み分けについて (その一). 信州大学教育学部研究論集 4: 139-158.
- 福田道雄. 1981. 不忍池, カワウの繁殖. アニマ 9 (10): 39-41.
- 水野信彦・御勢久右衛門. 1972. 河川の生態学. 築地書館, 東京.

Changes of avifauna at the middle basin of the Tama River

Tamagawa bird walk staff group, Tokyo chapter, Wild Bird Society of Japan¹

We tried to analyze the change of avifauna at the middle basin of the Tama River by using records of monthly bird walk, which were held for 10 years since 1980. The main results were as follows.

1. A total of 115 species were observed. Thirty three (29%) of them were residents, 18 (16%) were summer visitors, 33 (29%) were winter visitors, and 31 (27%) were migrants or accidentals.
2. This area was useful for wintering species, but it is getting worse to breed.
3. Among waterfowl, Pintails *Anas acuta* and Smews *Mergus albellus* seemed to be decreasing and Gadwalls *Anas strepera* seemed to be increasing.
4. Terns have not been observed since 1986.
5. Japanese Wagtails *Motacilla grandis* tend to decrease and the ratio of this species to White Wagtails *M. alba* was reversed in this 10 years.
6. Breeding species in grasses tend to decrease in numbers.
7. Green Sandpipers *Tringa ochropus*, Little Terns *Sterna albifrons* and Gray-headed Buntings *Emberiza fucata* disappeared in this 10 years. On the other hand, Great Cor-

morants *Phalacrocorax carbo*, Greater Pied Kingfishers *Ceryle lugubris* and Japanese Pygmy Woodpeckers *Dendrocopos kizuki* newly settled to this area during the same period.

1. c/o Mitsuaki Narita. Toyogaoka 5-1-11-501, Tama-shi, Tokyo 206

Written by Masaki Okuyama. Wildlife Protection Division, Environment Agency.

Kasumigaseki 1-2-2, Chiyoda-ku, Tokyo 100